

「“ふたり”なら、もっと強くなれる。」

校長 原田尚昭

皆さん、おはようございます。長かった夏休みが終わり、今日からいよいよ2学期が始まりました。長かったとは言いながらも、特に3年生の皆さんにとっては就職や進学に備えての本当に「熱い」夏であったでしょうし、2年生や1年生の、特に運動部を始めとする部活動に精を出して、数々の練習試合等をこなしながら新しいチーム作りを模索して来た人にとっては、あっという間であったと言えるのかもしれませんが。新たなる学期の始まりに際して、「この2学期の目標はこれだ!」と、皆さんそれぞれが今日心の中で明確にしてくれることを願っています。

さて、7月から8月にかけて、私達の日本や世界を取り巻く状況にも大変な変化があり、また、科学やスポーツの分野でも「えっ!」と驚くような成果や快挙が報道されました。恐らく皆さんも、例えば高校野球を観戦する中で、感激する場面や或いは選手たちの苦労を伝える裏話に勇気づけられたということが何度もあったのではないかと思います。私自身も、皆さんと同じように毎日テレビや新聞、或いはネット上で様々な報道番組や記事に接する中で「うーん、凄いな。」と思わず唸るようなことが何度もあったのですが、今日はその中から一つ紹介しようと思います。

先週、8月28日(水)のNHK特集で「“ふたり”なら、もっと強くなれる」という番組がありました。この日は、丁度来年の東京パラリンピックまであと1年ということで、それを意識して組まれた特集番組であったのですが、全盲の、つまり全く目が見えないアメリカの青年が100m走で10秒台に挑戦しているという話と、日本の、やはり全盲の40代前半の女性がマラソンで金メダルを目指しているという2つの「挑戦」が紹介される番組でした。皆さんもよくお分かりの通り、目の見えない人は自分一人では走ることが出来ません。「伴走者」と呼ばれる人がいて、その伴走者と選手との「絆(信頼関係)」が如何に大事であるかということをお教えしてくれました。

まず、100m走で来年出場するアメリカの青年、デイビッド・ブラウン君(26)は、今の伴走者であるジェローム・エイバリーさん(40)と出逢って、飛躍的に速度が増したということです。元々エイバリーさんは若い頃10秒17の記録を持つ選手であったということですが、何よりも私たちが驚くのは、二人が並んで走る姿を横から高感度カメラで撮影した時、手の振りや足の位置までびたりと重なっている、つまり完全にシンクロしているということです。これを可能にしているのが、二人が持つ僅か10cmのロープであるということです。スタートを切って、1歩目、2歩目は少しずれがあるものの、3歩目で二人の動きはほぼ一致し、後は互いに全速力で駆け抜け、現在10秒97の記録を持っています。伴走者のエイバリーさんの言葉が印象的でした。「私たちは単に陸上競技をやっているだけではない。私たちがしていることは私たちの人生そのものなのです。」来年の東京が楽しみです。この二人の名前を是非覚えて下さい。

もう一人、番組で紹介されていたのが道下美里選手で42歳。前回のリオデジャネイロパラリンピックのマラソンで銀メダルを取り、東京では勿論金メダルを目指しています。彼女には複数の伴走者がいるのですが、今回特に取り上げられていたのが青山由佳さんという33歳の公務員の方でした。マラソンの伴走者は、先程の短距離走とは違って、約30cm程の「絆」と呼ばれるロープを持つだけで、その手をほとんど動かしません。その代わりに、マラソンでは前後左右にも他の選手たちが多数走っており、また道路状況も刻々と変化するので、その都度状況を的確に判断して、選手に短く指示を与えます。青山さんは、まだ伴走者として慣れていない時に判断を誤って、道下選手が他の選手と接触して転倒してしまうということがあり、非常に落ち込んでいたのですが、試合後道下さんに「困難を一緒に乗り越えれば強くなれる。」と言われて立ち直ることができたと言います。つまり、一般的には「伴走者が選手を支えているように思われているけれども、実は伴走者も選手に支えられていることがたくさんある。」というのが青山さんの言葉でした。この二人の活躍にも注目しておいて下さい。

そういった視覚障害者の活躍についての貴重な番組を見て感慨にふけていたその二日後、先週の土曜日の30日の新聞に、大阪大学の医療チームがiPS細胞から作った角膜の細胞を移植する手術に成功し、その40代の女性の患者さんが日常生活には支障の無い程度まで視力が改善しているという記事が載っていて、科学の進歩は本当に素晴らしいということを実感しました。

今日、私は東京パラリンピックに向けて取り組んでいる二組の例を紹介しましたが、恐らく皆さんの中にも、人には余り言わないけれども、目であれ、耳であれ、或いは内蔵の病気であれ、何らかの問題を持ちながら日々部活動や勉学に励んでいる人も多いと思います。そのことも踏まえつつ、この2学期が皆さん一人ひとりにとって大きな飛躍の時となることを強く願っています。まずは、9月末の体育大会を成功させましょう。以上で式辞を終わります。